

みのの EDO

東京⇄笠原情報誌 MAIL版

多治見市モザイクタイルミュージアム

特別展 | guse ars exhibition

「PATTERN SEED ～漂う未来模様～」

開催中
!!

多治見市モザイクタイルミュージアム(岐阜県多治見市)では、アーティスト・guse arsによる特別展を開催中(～2019年5月12日(日)まで)。陶磁器の欠片から生まれた多様な模様が展示会場を埋め尽くした。



展示会場入り口。正面は制作した模様を拡大したもので、前に座って記念撮影をする人も。

木の板に模様を転写して展示。かすれも風合いとして生かしている。下の部分には種子(シード)となったかけらが添えられ、模様(パターン)のタイトルが書かれている。



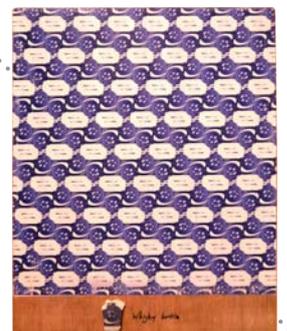
作品制作の元となる陶磁器の欠片。
写真提供 guse ars



Hyacinth(ヒヤシンス)



The Ant and Grasshopper
(アリとキリギリス)



Whiskey bottle
(ウイスキーボトル)

想像が広がる
タイトル!

過去へ未来へ—ひとつの欠片から広がる世界

特別展の会場に展示されているのはタイルではなく、青色で描かれた多様な模様——。これらはすべて陶磁器の欠片(かけら)から生み出されたものと聞くと、不思議な感覚で見入ってしまう。

作者のguse ars(グセアルス)は、河川敷や海岸などに流れ着いた陶磁器の欠片を使って新たな模様を創作する二人組のアーティスト。2015年のミュージアム開館前のイベント*でも作品を披露した。

今回の制作で用いたのは、多治見市を流れる土岐川の河川敷で拾われた欠片。ここ笠原町ではタイル製造がされる前は茶碗が生産されており、そうした地域の歴史をも蘇らせる。窯跡から掘り出された欠片を用いた作品も新たに制作された。

またユニークなのは、イベント時に制作した模様を施したタイルを割り砕き、その欠片から新たな作品を制作するという試み。一つの欠片が種子(シード)となって模様(パターン)が生まれ、遺伝子のように次世代へと受け継がれ、伝えられていく有機的な営みが表現されている。

展示会場の手前のスペースでは、「HOMETOWN～笠原茶碗と染付模様」を同時開催(～2019年5月19日(日)まで)。茶碗の産地だった時代の笠原を伝える。

*「washed pattern TAJIMI～欠片から生まれる未来の模様～」



笠原町などの窯跡から掘り出された欠片を使った作品。人の手に渡らず、本来の役割を果たせなかった茶碗のレクイエム的な意味合いも込める。
(欠片の所蔵は、多治見市文化財保護センター、多治見市美濃焼ミュージアム)



guse arsは、村橋貴博さんと岩瀬敏美さんによるアートプロジェクト。写真提供 guse ars

一枚のお皿から6つの模様！



欠片の元の姿(陶磁器)を調べて類似品を展示。並べられた6つの模様の元となった欠片は、すべて一枚のお皿のものと判明。

お皿に描かれた模様は「ウィロー・パターン(柳模様)」とよばれ、18世紀末にイギリスで生み出されたシノワズリー(中国趣味)の模様と考えられている。日本でも明治時代ごろからこの模様の製品が輸出用につくられていた。

第一世代

第二世代

第三世代



土岐川で拾った欠片(第一世代)から生み出された模様(第二世代)を転写し、タイルを制作。そのタイルを割ってできた欠片で新しい模様(第三世代)を生み出す。



「HOMETOWN～笠原茶碗と染付模様」

グセアルスが用いたのは、白地に青色の模様をつけた染付磁器の欠片。その故郷のひとつ、笠原の茶碗を手がかりに染付の技法を紹介。

明治以降の笠原では、磁器製造とくに碗類の製造が盛んだった。戦後タイルの一大産地となったのは、茶碗の窯業技術という下地があつてのこと。



装飾の技法のひとつである「吹き絵」用の型。器にあてがい、顔料を吹きつけて模様をつける。ほかに「下絵付」「転写」などの技法がある。

多治見市文化財保護センターでは、「太白焼展」を開催中(～6月28日)。太白焼は19世紀頃に瀬戸・美濃地方で作られた陶器や磁器に染付を施したもの。併せて鑑賞するのもおすすめ。



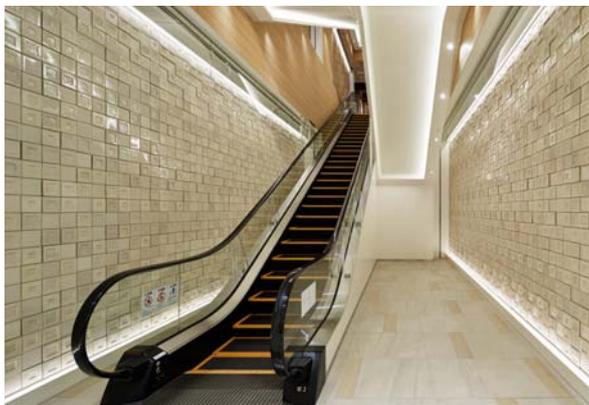
国内の様々な建築材料と 技法で各フロアを演出

まるごとにつぼん

(東京都台東区浅草)

下町らしい雰囲気外国人観光客にも人気の東京・浅草。昔ながらの商店街に新しい店も続々と誕生。内外装にタイルが使われた店にもよく出会う。

「まるごとにつぼん」は日本全国の食や生活用品を扱う商業施設。内装にも国内の様々な建材や技法を用い、階ごとに特徴をもたせている。主にタイルを用いた内装部分について紹介する。



設計デザインを考えるにあたり、魚市場や青果市場も参考に。エスカレーター脇のタイルは、実際に市場で使われていたタイルをイメージし、オリジナルで製作。デザインに市松様を取り入れている。



デザイン、厚さ、色味を少しずつ変えたタイルをランダムに張る。サイズは12センチ角。



1階のフロアの様子。ロゴデザインは市松模様をモチーフとし、赤い丸い蓋を開けると、日本のもの・こと・風土がぎゅっとまるごと詰まっているという施設名称を表している。



「につぼん食市場」 地方色豊かな食が集合

各店舗にも
様々なタイルを
使用



「まるごとにつぼん」とは

かつて映画館や劇場が建ち並んだ興行街「浅草六区」に建つ15階建てビルの1~4階を占める商業施設で、日本全国の食や生活用品を扱う。運営は阪急阪神東宝グループに属する(株)まるごとにつぼん。浅草六区の賑わいを取り戻したいという思い、また、全国各地の知られざる逸品を紹介することで、「浅草から地方を元気にしたい」という思いをもって、2015年12月オープン。

エントランスに入ってすぐに目に入る丸柱は、「縁を結ぶ」という意味を込め、しめ縄をイメージ。柱の直径はタイルの割り付けロスが出ないように配慮。

2
階

「くらしの道具街」 地方発の生活用品をセレクト



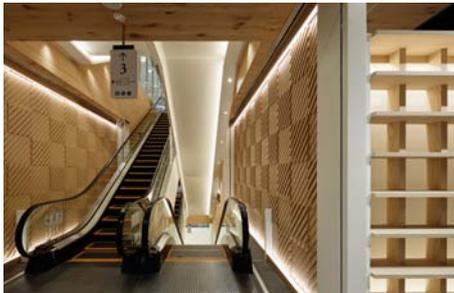
各地域の職人がつくった商品
や伝統工芸品、地方発の生活
用品が並ぶ。



共用部の壁に張られた大谷石には、割
り肌・コボリ・ピシャンなど様々な加工
を施している(左下)。木の壁と天井に
は削り痕を残す技法「なぐり」を用い、
亀甲・矢型・竹縁など様々なパターンを
表現(右上)。



「茶寮 つぼ市製茶本舗」の
壁は、左官職人・久住有生
(くすみなおき)氏が施工。



木格子により市松模様を表現。



トイレに張られたタイルは
着物の柄をイメージ。
(写真はこども用トイレ)



全国の市町村のPRスペース「おすすめふるさと」。現在は14の自治体
が特産品を展示・販売。観光情報なども発信。



全国各地の観光フリーペーパーをベンチに座って
ゆっくり閲覧できる。

3
階

「たいけん広場(地方体験フロア)」 全国の市町村が出展



共用部の壁は版築で製作。
左官職人の手作業により積
み重ねられた積層は時間の
経過を表す。
*版築(はんちく):土を押し
固めて壁や基礎にする技
法。



トイレの様子。
(写真は女子用トイレ)



共用部は縁側の脇にある竹林をイメージし、多治見市にあるタイルメーカーの倉庫に保管されていた昔のタイルが張られている。



京もつ鍋 亀八



創彩イタリアン 神楽



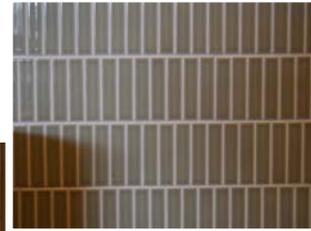
各飲食店では
外装・内装ともに
様々なタイルを使用



共用通路と店舗間に「縁側」のような曖昧な空間を設定している。



ひろしまお好み焼き 凡



沖縄家庭料理店 琉球市場やちむん

まるごとにつぼん・業務部 杉田佐公乙さんより

2015年12月に開業した「まるごとにつぼん」は、「東京楽天地浅草ビル」の1階から4階部分からなる商業施設です。開発時は、一つの設計事務所がほぼすべての店舗、そして共用部を統一的に設計したので、全体的に一体感のある空間となっております。タイルや、木など、素材から厳選した建材を使用しているため、20年、30年と長く使えるよう、手入れをしていきたいです。

まるごとにつぼん

東京都台東区浅草2-6-7

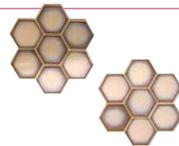
浅草寺本堂に向かって左手を進み、徒歩約3分。5～13階まではホテルとなっている。



トピックス

美濃焼タイル女子会主催 「美濃焼タイル展」開催 内装タイルの魅力的な使い方を提案

乙女心をもつ
男性も歓迎!



1月16日～2月15日、名古屋モザイク工業名古屋ショールーム(名古屋市東桜)で、タイルメーカー等10社が参加し、「美濃焼タイル展」が開催された。主催したのは「美濃焼タイル女子会」。展示や会のことについて、代表・古田由香里さんに伺った。



テーブルやピアス、時計も並んだ展示空間は雑貨屋さんのようで乙女心がかきたてられる。モザイクタイルに惹かれるのはやはり女性が多い。この展示を主催したのも「美濃焼タイル女子会」として活動する女性たち。会員は約30名。おもにタイルメーカーや商社で仕事をする人たちにより結成され、約一年がたつ。

会の代表はモザイクタイルの製造・販売を行なう丸万商会の社長・古田由香里さん。「男性中心だった企画・開発・営業において、ここ数年で女性が増え、活躍が目立ってきました」。タイル関連企業が集まる多治見市笠原町界隈で、数少ない女性社長でもある。

会では定期的に会合を設け、釉薬や坯土(はいど・タイルの原料)などについて学ぶほか、会員同士の交流を深めているという。この展示も会員の提案により実現した。

長年外装タイルを生産の主力としていたタイル業界だが、近年は内装タイルにシフトしつつある。内装に使われるカラフルで形も様々なモザイクタイルの分野では、まさに女性的センスが求められるようだ。

「SNS等を活用し、内装タイルの魅力的な使い方を伝えたい。そのために施工事例を増やす取り組みを始めます。建築やデザインに携わる方に向けてもタイルを訴求する活動ができればいいですね」(古田さん)。

「性別関係なく、私たちの活動に関心をお持ちの方、応援していただける方、ぜひご連絡ください!」とのことなので、乙女心をもつ男性も参加し、タイルの新たな魅力を発信してほしい。

参加企業:オザワモザイクワークス/S-sense1285/加納 未来室/MIZNO作善堂/杉浦製陶/セントラル・パシフィック・トレーディング/日東製陶所/久松製陶/丸万商会/山周セラミック

様々な色と
形のタイルたち



タイルシンクや
雑貨もあります



3月11日～4月12日 「美濃焼タイル展」

名古屋モザイク工業 大阪ショールーム タイルギャラリーにて開催!

営業時間: 10:00～17:00 休業日: 日曜・祝日

大阪市中央区備後町2丁目1番1号 第二野村ビル1F

*今回の展示は、美濃焼タイル女子会ほか、美濃焼タイルの数社が加わって開催します。



1～2月の展示会場の名古屋ショールーム

トピックス

4月27日～東京ステーションギャラリーで開幕、
全国4カ所を巡回

「ルート・ブリュック 蝶の軌跡」展

物語を思わせる絵柄や、鮮やかでありながら深みのある色合い。見る者の心の奥底に語りかけるような小さな陶板や壁画の作者は、フィンランドを代表するアーティスト、ルート・ブリュック (Rut Bryk, 1916-1999)。今年は無後20周年であると同時に、日本とフィンランドの修好100周年。日本で初めて網羅的に作品を紹介する展覧会が開催される。



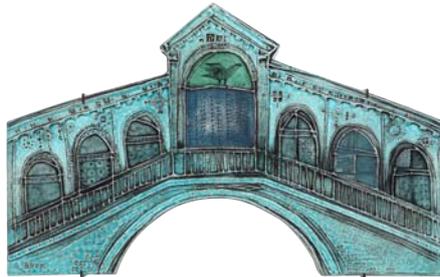
ライオンに化けた口バ(1957)



蝶たち(1957)



母子(1950)



ヴェネチアの宮殿：
リアルト橋(1953)

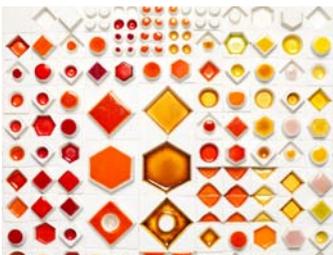


結婚式(1944)

Tapio Wirkkala Rut Bryk Foundation's Collection / EMMA - Espoo Museum of Modern Art ©KUVASTO, Helsinki & JASPAR, Tokyo, 2018 C2531

タイルを使った作品も

60年代後半から、抽象的な表現を深め、膨大な数のタイルピースで構成する「タイル・コンポジション」シリーズを制作。



スイスタモ(部分)(1969)



黄金の深淵(1969)



色づいた太陽(1969)

全国4カ所を巡回展示

- 東京ステーションギャラリー (2019年4月27日～6月16日)
- 伊丹市立美術館・伊丹市立工芸センター (2019年9月7日～10月20日)
- 岐阜県現代陶芸美術館 (2020年4月25日～7月5日)
- 久留米市美術館 (2020年7月18日～9月6日)

『はじめまして、ルート・ブリュック』(発行: ブルーシープ)



本書は展覧会に先立ち刊行されたビジュアルブック。Books and Modern+Blue Sheep Gallery (東京都港区赤坂) では2018年12月21日から約1カ月間、出版を記念した展示を開催。写真家・前田景氏がフィンランドで撮影した写真とブリュックの作品4点を特別展示した。

皆川明(デザイナー)、酒井駒子(絵本作家)、鹿兒島陸(陶芸家、アーティスト)、志村ふくみ、志村洋子(ともに染織家、随筆家)、葛西薫(アートディレクター)らが文章を寄せる。



作品「アッシュ・トレイ」



ラップランドでの風景